

氏名	高 嶋 成 光
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第 808 号
学位授与の日付	昭和 51 年 12 月 31 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学位論文題目	潜在性甲状腺癌の臨床病理学的研究
論文審査委員	教授 小川勝士 教授 田中早苗 教授 妹尾左知丸

学位論文内容の要旨

甲状腺癌の組織発生を追求する目的で、剖検および手術甲状腺からみいだした長径 1.0 cm 以下の潜在性癌を対象にして、形態学的特徴と発育様式に重点をおき、臨床病理学的検討を行なった。また同時に発見された転移性甲状腺癌、腫瘍類似病巣についても同様の観点から検討した。

剖検甲状腺 500 例と手術甲状腺 259 例の通常の病理組織検査材料から発見された原発性潜在性甲状腺癌は、それぞれ 21 例 (4.2%)、10 例 (3.9%) であった。合計 31 例の組織型別分類は、乳頭腺癌 25 例、汙胞腺癌 6 例であり、男性 16 例、女性 15 例、年齢は 18 才から 76 才にわたり、平均年齢 57.2 才、大きさは 0.04 cm から 1.0 cm にわたり、平均長径 0.40 cm であった。腺内転移は 4 例に、リンパ節転移は 9 例に認められた。

乳頭腺癌 25 例は組織学的特徴から、硬化型、嚢腫型、非硬化型に分類され、硬化型はリンパ節転移、腺内転移を有するものが多く、組織学的に臨床的顕性癌と明確な差は認めなかった。嚢腫型は papillary cystadenocarcinoma と結びつくもの、非硬化型は他の 2 型に比し微小であり、形態学的に初期発生像に近いものと考えた。

汙胞腺癌 6 例は、腫瘍組織自体の異型性を示標に診断し、3 例には被膜形成傾向が認められ、3 例は被膜を欠き直接周囲甲状腺組織に接していた。連続切片にて精査したが、血管侵襲像は認められず、またリンパ節転移、遠隔転移もなく、臨床的には無視できるものかもしれないが、組織発生の解明には意義があると考えた。

転移性甲状腺癌は悪性腫瘍剖検例 349 例中 12 例 (3.4%) を占め、乳癌に頻度が高く、増殖形式はびまん性浸潤型と限局性結節形成型がみられたが、すべて血行性に波及したものであり、生前に甲状腺への転移を疑った症例はなく、潜在性転移性甲状腺癌といえるものであった。

腫瘍類似病巣は、いわゆる solid cell nest に相当するもので、初期発生像の組織学的所見から扁平上皮化生に由来するものと推測した。

原発性潜在性甲状腺癌の手術成績は非常に良いといわれてきたが、本研究の対象とした手術例 10 例中 1 例に再発死亡をみた。したがって、外科的治療に臨んでは、乳頭腺癌、とくに硬化型では、切除と郭清範囲は臨床的顕性癌と同様に決定されるべきである。

論文審査の結果の要旨

本研究は 500 例の剖検症例および 259 例の手術材料について甲状腺を病理組織学的に検索し、計 31 例に潜在性癌を発見してその組織型と増殖、進展、転移との関係を追究考察したものであるが、臨床的のみならず病理学的にも甲状腺癌の組織発生を明らかにする上に重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。